

□海外文献紹介□

**降圧剤と鎮静剤の使用は大腸癌の
一大リスク因子か？**

Is the use of antihypertensives and sedatives a major risk factor for colorectal cancer?: *Suadicani P, et al* (Scand J Gastroenterol 28: 475-481, 1993)

大腸癌のリスク因子として、運動、喫煙、アルコール、コーヒー、肥満、アスピリン、非ステロイド系鎮痛剤との関連が研究されているが、主たる焦点は食事性因子に向けられている。

発癌のメカニズムとして、糞便中の発癌物質が腸粘膜に長時間接触す

ることが考えられている。種々の薬剤が、発癌物質を形成し、かつ腸管運動に影響を及ぼすことが知られている。しかしこれまでは、薬剤と大腸癌のリスク因子に関してはアスピリン、非ステロイド系鎮痛剤以外はほとんど注目されていなかった。

そこで著者らは、40～59歳の5,249人の男性を対象に18年間にわたるコホート研究を行った。検討因子は、薬剤以外は喫煙、アルコール、コーヒー、運動量、社会的階級などについてアンケートを行った。その結果、結腸癌51人と直腸癌42人が発見された。

降圧剤の使用は、結腸癌リスクと

明らかな関連があることがわかった。未使用群の指数を1とすると、5年以下の使用群では、1.31倍、5年以上使用例では4.45倍のリスクを示した。鎮静剤では、未使用群を1とした場合、まれに使用した群では1.22倍、しばしば使用した群では3.46倍のリスクであった。一方、直腸癌との関連はなかった。

結論として著者らは、降圧剤や鎮静剤の使用は結腸癌の強力なリスク因子である可能性を示唆した。

(愛知県がんセンター消化器内科

小林 世美 抄)